

新刊紹介

川村裕子著『装いの王朝文化』

大竹 明香

本書は、衣、衣装を視点として、『源氏物語』や『蜻蛉日記』、『枕草子』などの王朝文学を読み解くものである。数多くの資料が残されているわけではない王朝装束の姿を捉え直すことによって、新たな解釈を展開する本書の内容を、以下各章に分けておおまかに紹介したい。

第一章「社会の呪縛と衣が語るもの」では、衣の持つ社会的な枠組みに焦点を当てる。今であれば「その人らしさ」を表す「着崩す」ことが、王朝の男性貴族が公の場（宮中）において装束が着崩れている場合は、嘲笑の的となっていたこと。ただし、「着崩れた」束帯姿とは反対に、狩衣姿に身を「やつす」ことは、都から離れた宇治へ通う『源氏物語』の作中人物、薫とおとして語られており、薫が身を「やつす」との意味について言及する。さらには衣が持つ「上下関係」を示す事象についても触

れる。

第二章「狩衣と恋が語るもの」では、前章で触れられている『源氏物語』の薫や光源氏の狩衣姿（やつすこと）が、王朝男性貴族の「恋」の表現方法であることに着目する。光源氏が夕顔に対して身をやつしていた意味について述べ、光源氏が夕顔の前に自らの姿を見せたその先に語られる二人の恋の悲劇について読み解いている。また本章のテーマである、狩衣姿が「恋」の表現であるという切り口から、『蜻蛉日記』に唯一描かれる兼家の狩衣姿についても、「恋の趣が込められている」とする。

第三章「直衣と普段着が語るもの」では、王朝男性貴族の正装と普段着についての詳細な説明がなされており、そのうえで直衣姿は普段着か否か、との問いのもと、『蜻蛉日記』に描かれる兼家の直衣姿について、新たな解釈が提示されている。ここでは具体的な内容については触れない。ぜひ、本書をお読みいただきたい。

第四章「人物の衣が語るもの」は、人が着ている衣と人格の関係について、つまり衣が表出する人物像をテーマとする。ここでは主に『源氏物語』の作中人物髭黒と、

『枕草子』に描かれている源方弘にまつわる叙述から、それぞれが纏っている衣と、その人に付与されたイメージの「ずれ」について言及する。特に『源氏物語』の髭黒については、その名が表すとおりの「無骨」なイメージが、いかに玉鬘の心情に寄り添ったものであり、作中に語られる彼の装いから読み解く人物像との「ずれ」のあることを指摘する。

第五章「時のなかの衣が語るもの」では、衣装の縫製に焦点を当てる。そもそも、王朝男性貴族が身に纏っていた衣は、それを縫い上げる為にどのくらいの時間を必要としたのだろうか。本章では、『枕草子』にある「とみの物」との表現に着目し、さらには『蜻蛉日記』や『源氏物語』、『後撰和歌集』などの記述から、意外にも縫製にかかる時間の短かったことが解き明かされている。また、夫の衣装の用意は妻の仕事であったこと、それに関わる女性たちの「思い」にも言及する。

第六章「着替えの衣が語るもの」では、衣を着替えることに着目する。衣の縫製にかかる時間同様、何重にも重なっている衣を着替える時間はどのくらいのものなの

か。本章では漢文日記や『源氏物語』、『枕草子』などから、着替えにかかる時間を読み解く。くわえて、『蜻蛉日記』が描く衣を纏った兼家の立派な姿と、着替えの能動についての記述の省略、それに関わって、兼家の姿と逆照射させるように描かれる道綱母の姿についての解釈が提示されている。

第七章「親子の衣が語るもの」では、とりわけてその詳細な実態のわからない、子どもの衣装について、いくつかの文献からその様相を浮かび上がらせる。『蜻蛉日記』の作者である藤原道綱母は、裁縫が得意であった。本章では、道綱母が息子である道綱の為に用意した賭弓や舞人を選ばれた際の衣についての詳細な検討と、道綱母の衣に込めた思いに焦点を当て、『蜻蛉日記』を読み解く。

以上、各章の要旨を述べてきた。衣は単に身体を守り包むものとしての機能だけでなく、「人々にいろいろな制約を与えて」もいる。また一方で、「人をやさしく包んでもいる」。本書では衣を身に纏う人のみならず、衣を用意し着替えさせ、晴れの場へと送り出す女性の心情にも焦点を当てて

いる。そのうえで、衣は「人の心の容れ物」と述べられている。衣が語る「人の心」について、また衣の持つ意味を問い直す本書を、ぜひ多くの方に手に取っていただきたい。

(二〇一六年七月 KADOKAWA 角川選書 四六判 一八七頁 本体一六〇〇円)

(おおたけあかり 大学院後期課程在學生)

平山城児著『鵬外「奈良五十首」を読む』

湯本 優希

森鷗外「奈良五十首」は、大正十一年一月の『明星』に、M・Rの署名で掲載された。この「奈良五十首」は、鷗外が大正七年から十一年にかけて、五回にわたり奈良へ趣いた中の、前四回の体験をもとに作られている。

本書は、『鷗外「奈良五十首」の意味』（一九七五年、笠間書房）を改訂・増補し表題を改めたものであり、鷗外の「奈良五十首」を一首一首読み解いた上で、「総体」としての全体像を把握することを目的としている。従来の、「奈良五十首」の中から数首を取り上げた論考や鷗外論の一部としての扱いとは異なり、五十首全てに注解を施し、さらにそれらの「総体」に意味づけを行っていく。

章構成は「一 序にかえて」「二 帝室博物館総長兼図書頭としての鷗外」「三 「奈良五十首」「四 「奈良五十首」の構成」「五 「奈良五十首」の意味」「六

「我百首」の構成「七 万葉集と鷗外の「うた日記」となっている。各章ごとに紹介していきたい。

まず「一 序にかえて」では、従来の「奈良五十首」に関する論考とは異なる、「塊り」としての意味を捉えようとするこの意図が論じられる。斎藤茂吉は「奈良五十首」を「一種の思想的抒情詩」と評したが、それは適切ではあるものの、別の見方によつては「過褒」とも言えると指摘される。しかし鷗外の五十首の「総体」としての意図は「思想的叙事詩」であつたのだろうかと示唆される。

「二 帝室博物館総長兼図書頭としての鷗外」では、鷗外の当時の職務について論じられる。大正七年から十一年に奈良を訪れた鷗外は、大正六年十二月に帝室博物館総長兼図書頭に任ぜられていた。この時、鷗外が高嶋米峰による要請文を意識し、さまざまな革新を行っていたのではないかと指摘とともに、その革新の内容が紹介される。なかでも、正倉院の拝観者資格の拡張という功績については第三章において「奈良五十首」の内容との関連性が述べられる。

「三 「奈良五十首」では、五十首を一首目から順に読み解き、それぞれに詳細な注解を行っている。鷗外の日記委蛇録における記述も数多く参照され、そのよまれた背景とともに一首一首に踏み込んでいく。一見すると作者が一度に奈良を訪れた際に五十首がよまれたという構成に見えるが、一首ごとに成立の背景を検討してゆくと、「奈良五十首」は四年間という時間の中でそれぞれさまざまな時期によみためられていたものであることが明らかとなる。

また、一首一首の解釈だけでなく、本書の目的である「総体」としての「奈良五十首」という位置づけに鑑み、五十首内の時間や主題の連関といった相關関係についても緻密に記される。とりわけ、五十首のうち一首だけを取り出して論じられる際の印象と、「総体」の一首として解釈される際の印象の差異が示され、「奈良五十首」を「総体」として考察するという視座から見たとき、一首一首に関する結論が変化するという非常に意義深い指摘がなされる。

さらに、鷗外は仏教語の「三毒」をその中のひとつである「貪欲」、つまり金銭欲として扱っており、こうした欲望を持つ

人々を悪人としてしていると指摘され、この「三毒」や「富人」等の金銭欲にまつわる語が「奈良五十首」全体のテーマにおける「キイ・ワード」のひとつといつてもよいと記される。これらを基軸として第一章で提示された「古きよき時代の奈良」と「現在のいまわしき人間世界」という対立に収斂される、鷗外の率直な讃美や憤りが見られると述べられる。一首ごとの緻密な注解と丹念な全体像の分析により、一首一首が全体へと還つていくことが明確に提示されているのである。一見平凡に見える一首が全体の働きの中で意味を持つてくるという鋭い示唆がなされている。

「四 「奈良五十首」の構成」では、「奈良五十首」の構成をテーマごとに分類し、再編成された「奈良五十首」が示される。この整理によつて「奈良五十首」の配列が制作年代順ではなく、秩序整然と並べられていたことが明らかとなる。また、これらが奈良を訪れた際の一度の体験をもとによまれたように考えられてきた原因は、鷗外によつて再構成された五十首の配列にあつたと指摘する。さらに、一首一首の独立性より全体としての表現に力点が置かれた古

今集と同じ意味合いを持たせるためひとつの「塊り」としたのではないかと続く。意図的な配列によって構成された五十首を一つの作品として捉えることこそ鷗外の意図を把握することであると述べられ、「奈良五十首」の新たな全体像が提示されている。

「五 「奈良五十首」の意味」では、鷗外による、明治三十七、八年の日露戦争中に作られた『うた日記』や、明治四十二年五月に発表された明星調の意識的な模倣を土台とした「我百首」、明治三十九年から大正六年の長期間にわたり作られ、『うた日記』や「我百首」とは別種の歌が編まれた常磐会詠草を引き合いに出し、「奈良五十首」との比較が行われる。これにより、鷗外の他のさまざまな歌に比べ、「奈良五十首」の「総体」は最も散文的であり、露骨な心情の吐露と批判がこめられていると記される。この批判や怒りは単純なものであるため、第一章で触れた斎藤茂吉の評した「一種の思想的抒情詩」の「思想的」が過褒だと述べられるのである。また、鷗外が『うた日記』の中で万葉集の影響から長歌形式を試みたものの、近代において長歌

の役割が散文にとってかわられたことでその試みを断念したことに触れ、鷗外が複雑な内容を盛り込んだ長歌と同じ効果を持たせるべく、短歌を数多く集めて一定のテーマを持つよう構成したものこそが「奈良五十首」だったのではないか、というきわめて重要な指摘がなされている。

「六 「我百首」の構成」では、第五章でも触れられた鷗外の「我百首」をその背景や内容の面から論じられている。その中で「我百首」には「奈良五十首」ほどの緊密な構成はないのではないかと述べられる。

「七 万葉集と鷗外の「うた日記」」では、鷗外にとって万葉集が異質なものであるということに触れながら、これまで指摘されてこなかった、「うた日記」と万葉集の語句や形式が密接な関係にあることを指摘する。鷗外はどのような歌風の歌でも作ることができるテクニシャンであり、万葉集から語句や表現上のテクニクを借用したと示されている。

本書によって提示された「総体^マ」として「奈良五十首」を捉えるという試みの有効性は、他の鷗外の歌だけでなくさまざまな

歌の「総体」において、新たな可能性を見出すことができるといえよう。さらに、この貴重な提言は、鷗外研究や歌の解釈だけでなく、広く文学研究において数多くの新たな視点を得られる契機となるといえる。ぜひ本書を繙かれない。

(二〇一五年一〇月 中央公論新社 中央文庫 二九八頁 本体一〇〇〇円)

(ゆもとゆき 大学院後期課程在学学生)